

映画監督 池谷 薫 さん



歴史問題に主眼を置いたドキュメンタリーを撮り続ける池谷薫監督に、インタビューを試みた。単館系映画ではロングランを記録し続ける「蟻の兵隊」。この作品は、戦場という過酷な環境で青年時代を過ごし、戦後60年経った今もなお、真実を追い求める人物に焦点を当てている。国家への責任追及。初年兵が経験する殺人、強姦、鉄拳制裁。なぜ、監督は歴史問題を追いつけるのか。なぜ、単館上映での興業が成功したのか。監督自身にその思いを語ってもらった。

(聞き手：臼井 一廣)

—監督はテレビの世界ご出身ですが、テレビの世界と映画の世界の違いはなんですか。

テレビですと、ブラウン管の向こう側の視聴者の反応を生で知ることはできませんが、映画の世界ですと、劇場に行けば、受け手の反応が直接分かり、批評・感想も直接聞くことができるということです。

—「延安の娘」は監督が映画の世界に入った第1作目です。この「延安の娘」が外国の賞を取ったことで、監督になにか変化はありましたか。

私自身に変化はないですが、「次にどんな映画を撮るのだろう」という周りからの期待、関心が高まったと思います。

—弁護士の場合、夫婦がともに弁護士であるという例や、一方が弁護士で他方が事務局を手伝うという例があります。監督の場合、奥さまの権洋子さんが「蟻の兵隊」(以下「この映画」という)のプロデューサーをお務めですが、夫婦で映画を作ることにするエピソードをお聞かせください。

私たちの場合、かみさんと私の2人の会社ですから、2人で製作から配給まで行ないます。かみさんは私の監視役です。

映画を撮り出すと、極端な話、私は2～3年間、全く収入がないわけです。その間、かみさんが翻訳の仕事などをし、私はいわばヒモみたいなもんです(笑)。しかも、資金のあてができる前に、この映画を撮り出してしまいました。幸い、かみさんも、「この映画を撮るべきだ」という私の想いをよく理解してくれ、製作資金のカンパを集める事務局を作ってくれました。また、それこそ夜の3時ころにハタと起きて、「あのシーンのことなんだけど」と映画の編集の話が始まったこともありました。朝から晩まで映画漬けです。

—この映画を撮ろうと思ったきっかけは何ですか。

奥村和^{わいち}一さんとの出会いです。2004年4月の「延安の娘」の上映会で奥村さんと出会い、残留孤児問題での怒りっぷりに惚れたんです。普段は穏やかな爺さんなのに、恨み、つらみではなく、一点を見つめて真剣に怒るんです。隠された秘められたものがあるんだと思いました。そして、1週間後には、山西省残留兵問題について奥村さんが集めた段ボール1箱分の資料が送られてきました。「映画にしなければならぬ」と思いました。

—この映画の内容について、お尋ねします。最初は、「国

に棄てられた兵隊」という元残留兵の被害者的な側面が強調されています。ところが、終盤では、「初年兵教育の問題」など、元残留兵の中国人に対する加害者的な側面も映し出されています。強姦された中国人女性との対話のシーン、敗訴判決に憤る元残留兵に昔の文書突きつけて過去を思い出させるシーン、奥村さんが自身の戦争体験を長年連れ添った奥さまにも多くを語っていなかったことなど。

そうです。山西省残留兵問題を解明するというテーマと自身の戦争体験と向き合うテーマは、一見、別のもので。しかし、奥村さんの中では、両者は繋がっているのです。軍そのもののメカニズムを解明しなくてはなりません。私は、人間ドキュメンタリーとして、この映画をいろいろな人に考えてもらいたかったのです。

——敗戦後60年以上が経ち、文書は散逸し、亡くなられた当事者も多い。「生き証人が数多くいるうちに映画化していれば、『国に棄てられた兵隊』という真実を明らかにできた」という後悔の念をお持ちですか。

いいえ。むしろ「間に合った」という思いです。10年前だったら、この映画を撮れなかったかもしれません。奥村さんが戦後ずっと心の中にため込んでいたものを80歳になって吐き出すという意味で、この映画は、まさに奥村さんの遺言なのです。「語っておかなければならない」ものだったのです。

——この映画は単館上映です。たとえ良い作品を製作しても、多くの人に観てもらわなければ、興業が成り立ちません。「映画を見せる」という視点で、この映画の特徴を聞かせてください。

まず、「宣伝プロデューサー」と「パブリシスト」という宣伝のプロが2名いることです。たとえば、もともと大衆が観る映画として成り立つのかという不安があったのですが、メディアに効果的に取り上げてもらえるように、公開時期を7月末から8月にしています。その他、メディアとの調整、効果的なチラシの作成などプロの仕事をしてもらいました。

つぎに、「蟻の兵隊を観る会」という勝手連が中心となり、コミュニティの輪を広げてくれていることです。mixiというサイトでの集まりが基点となり、メーリングリストを作ったり、チラシを配ったり、前売り券をさばいたりしてくれています。

この2つが相まって、大きなうねりとなったのです。



奥村さんは一点を見つめて真剣に怒る。秘められたものがあるんだ。「映画にしなれば」と思いました。

——軍人恩給の請求棄却という最高裁の判断が出ています。今後も、訴訟という形での日本軍山西省残留問題への取り組みを継続するのですか。

残念ながら、今回の裁判では世論の注目が全く集まらなかった。残留兵はまだ300人ぐらい生きていると思うのですが、原告は13名という小さな裁判になってしまい、メディアもほとんど取り上げませんでした。しかし、まだ諦めていません。再審が難しいことは分かっていますが、奥村さんがかき集めた段ボール3箱分の資料があります。何か別の切り口で、今後も、この資料から「軍命で残留兵は中国に残ったんだ」という真実を明らかにしていかなければいけないという使命感を持っています。

◎日本軍山西省残留問題

敗戦当時、中国の山西省に駐留していた日本陸軍第1軍59000名のうち約2600名が、武装解除することなく中国国民党系の軍閥に合流し（ポツダム宣言違反）、4年間、共産党軍との内戦に参加した。約550人が戦死し、700人以上が捕虜となった。元残留兵らは当時戦犯だった軍司令官が責任追及への恐れから軍閥と密約を交わし、「祖国復興」を名目に組織的に残留を画策したと主張し、他方、国は、残留兵は自らの意志で中国に残り、勝手に戦争を続けたと主張した。2005年、最高裁は、元残留兵らの軍人恩給支給の請求を退けた。

プロフィール いけや・かおる

1958年、東京生まれ。同志社大学文学部卒業後、テレビ・ドキュメンタリーのディレクターとして数多くの番組を演出。89年の天安門事件以降、中国での取材を積極的に展開。97年、蓮ユニバース設立。監督デビュー作となった「延安の娘」（2003年）は、ベルリン映画祭などで世界中で絶賛され、数多くの賞を受賞。「蟻の兵隊」は監督第2作。